

# 「失敗」と「ない」から「楽しい」を作ろう

クラフト作家 相馬智寿子

私は湘南でクラフト作家として活動をしています。貝、シーグラス、アクリル、樹脂、ガラス、木、紙、布など、様々な素材を使って海のイメージの作品を作っていますが、新しいものを作り出すためにいつも気にしていることがあります。材料そのものへの価値観や見方を固定させないということです。常に心は感覚的なイメージを追い、自由に素材を組み合わせます。逆に手は現実的な技術を担当していると言えます。

私は小さい頃から作ること、描くことを通してたくさんの発見をしてきましたが、それは、今ではアートという分野に限らず、仕事や家事や子育てなど日々の生活すべてに役立つものであると感じています。既成概念に左右されないイメージの豊富さは困難を乗り越えるアイデアに、手先の技術は様々なもののリフォームやリメイクにも役立ちました。そして何より、手を動かして工夫することによって「こうしたら、こうなる」という自分なりのノウハウをたくさん見つけることができました。

必要に迫られた材料や道具の整理は、すなわち頭の中を整理することと同じでしたし、必要なものとそうでないものを瞬時に判断し、使い分けることも、大きな関わりがありました。このような経験をしながら、次第にあることに気がついたのです。作ることとは一番身近なもので、しかも大切な要素がたくさん詰まった作業なのではないかと。

私はこのことを子どもたちにも伝えたいと思いました。そしてその気持ちは、まわりのお母さま方の熱心な気持ちにも後押しされ、2004年、子どものアートサークル「Four Seasons」としてスタートすることとなりました。現在では、湘南を中心に都内も含め約60人の子どもたちが参加してくれています。

## 素材を組み合わせる

私は「作る」ということを、立体の物を作るという意味に限ってはいません。紙に描くことも、貼ってコラージュすることも、折って立体にすることも、すべてが「創り出す」という意味において同じだと思っています。そしてそのすべては自由な素材の組み合わせから始まります。

白い紙に黒いペン。黒い紙に白いペン。白い綿に黒い石。黒い陰に白い蝶。白と黒の2色しかなくとも素材の合わせ

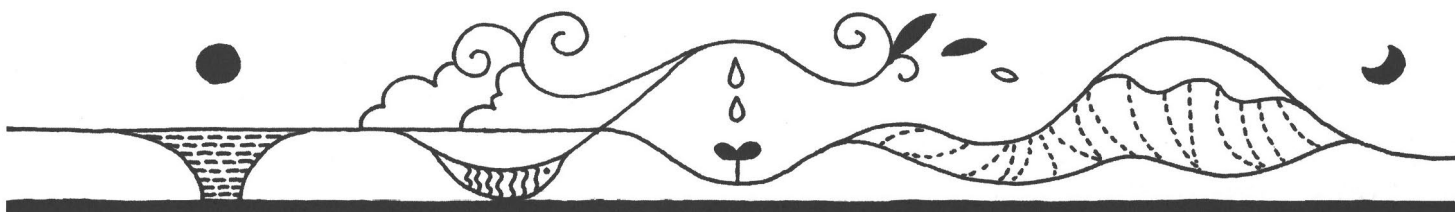
方でイメージは無限に広がります。これがその人の感じ方であり、その人そのものなのです。あらかじめ紙は白、ペンは黒と決めてしまう必要性はどこにもありません。しかし自由な分、自分でよく考えなくてはなりません。どの組み合わせが一番好きなのかを。作ることは、ごく小さい頃からですとやってきたことですから、その作業を通して考えたり、チャレンジしたり、失敗したりという様々なことを経験するのはもっとも無理のない、自然な流れだと思うのです。

私が子どもたちに教えた素材の組み合わせには、大きく2つの方向があります。1つは「いろいろな素材を組み合わせる」ということ。そしてもう1つは「限られた素材を組み合わせる」ということです。しかしこれらは大変長い話となりますので「いろいろな素材の組み合わせ」を「失敗から見つける」、「限られた素材の組み合わせ」を「ないことから工夫する」ということに絞ってお話していくことにしましょう。

ここで1つだけ、具体的なお話をする前に子どもたちに伝えたいことがあります。「やりたいことを、やりたくなくなるまでやろう!」ということです。これが意外にできていないのではないかと感じているからです。習い事や勉強などで忙しい毎日を送っていると、どうしても「いつまでやってるの!」とか「早くしなさい!」と言われてしまいますね。満足のいくまでやり続ける、といった環境がまず少なくなってきたのではないのでしょうか。これからお話する事は、決して難しいことでもお金のかかることでもありませんが、ただ一つ、やりたいと思った事を後回しにせず、やりたいと思っているうちに納得するまでやってみる、ということを大切にしてください。考える力、工夫する力は納得するまでやった時に初めてその子のものとなるからです。

## 楽しい組み合わせを「失敗」から見つける

素材の組み合わせのパターンは数えきれないほどあります。それをどう組み合わせてもおもしろいものになるでしょう。では、その中からどういった組み合わせを選びますか? ごく自然な組み合わせには、紙と絵の具、木と釘、



布と糸、などがありますね。しかし、紙と化粧品、木とシリコン、ワイヤとスポンジ、布と樹脂……こんな組み合わせもあります。

意外だけれど楽しくなるような組み合わせほど、実は失敗から生まれることが多いものです。たとえば、日々の生活でのごく小さな失敗……絨毯にお茶をこぼしたらシミになった、網戸に鉛筆を刺したら穴が広がった、濡れたテーブルに雑誌をおいたら模様が写ってしまった、などなど。しかし「失敗」を逆から読むと「発見」なのです。色を染めるにはお茶でもよい。綺麗な穴をこじ開けるには鉛筆でよい。雑誌の表紙は水でくっつく。「すごい発見だ!」というほど感動的でないものでも、何年ももの間に相当量積み重なっていくものです。その積み重ねが後々あらゆるところで芽を出してきますので、決しておろそかにはできません。まして頭ごなしに叱って、単に「悪いこと」として葬ってしまうのは、あまりにももったいないことです。では、私の失敗から生まれたいろいろな素材の組み合わせをご紹介します。

**\*紙と化粧品** 画用紙を用意しようとした時に、たまたま指についていたアイシャドウが画用紙にもついてしまったことがありました。その色は肌につけるよりはるかに綺麗なブルーに見え、淡い感じはパステルにも似ていました。そこからさらに口紅やマニキュア、アイライン、マスカラ、ファンデーションなどなど、色のついている化粧品を片っ端から画材代わりにしてみました。本当に楽しいものでした。使わなくなった化粧品でいいですね。マジックやクレヨン、絵の具などとの組み合わせで使えば、さらに楽しさやイメージが広がります。香水やアロマオイルなどをたらしせば「香る絵」もできますね。さて、この経験は容易に台所編にも変化していくでしょう。しょうゆ、ソース、ケチャップ、果汁などなど……。筆で塗らなくてもいいのです。台所にあるもの——スポンジや割り箸、スプーンの背やフォークなどでも。指で味見をしながら描いてみるのも楽しいですね。

**\*木とシリコン** 風呂場の目地をシリコンで修理していた時のことです。拾ってきた流木はまだ洗い終わらずに足元にありました。出にくくなったシリコンのチューブを勢い

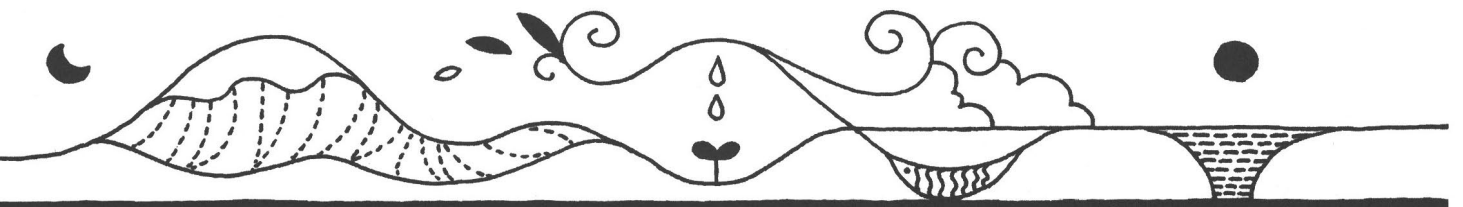


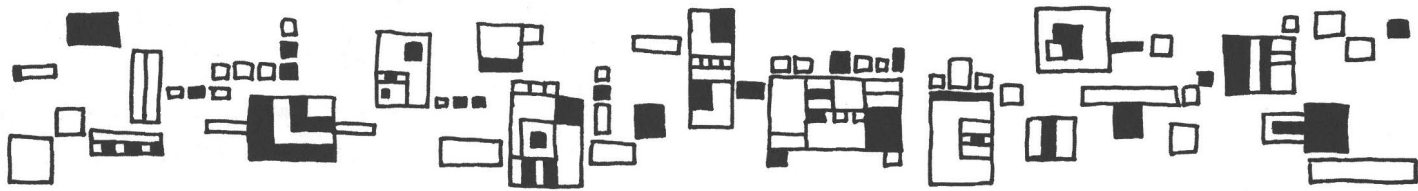
よく振った時、弧を描くように中身が飛び出し、壁や天井、そして流木にも白い水玉模様が散りました。湿った焦げ茶の流木にクリームのように白いシリコン。このコントラストはワクワクするものでした。シリコンを絞り出し袋で出せば、まるで本物の生クリームです。古い木肌とトロリと滑らかなものとの組み合わせが、新しく自分の価値観に取り入れられた瞬間でした。

**\*アルミワイヤとスポンジ** 押し入れの整理をしていた時、作りかけの座ぶとんがウレタンのまま数枚出てきました。適当に押し込んでしまったようで、上下左右にはいろいろな物の痕がついています。そこで意図的に痕をつけてみようカラフルなアルミワイヤを縫うようにいろいろな方向から刺してみました。ワイヤの芯が入るわけですから、曲げたりねじったりも簡単にでき、変わった形のオブジェのようなものが出来上がりました。

ここで予想しなかったこと…ワイヤがスポンジを突き抜ける際の音です。サクサクとした何ともいえない音でした。特に想像とは異なるようなもの、文字で読んでも良くわからない音や手触りなどは、実感のある経験が多ければ多いほど、想像力にも幅を与えていくこととなります。

**\*布と樹脂** エポキシ樹脂を扱っていた時です。ジーンズにたらしちゃってしまいました。濡れたような色は、樹脂が乾いてもそのまま、しかもかなりの硬度でした。そこで様々な物の上に布を置き、上から樹脂をかけて固めてみましたが、立体的でおもしろいオブジェとなりました。樹脂をか





ける部分とかけない部分では、同じ布がまったく違う顔を見せます。さらに出来上がりの凹凸は、裏と表が正反対ですから、不思議な世界を見ることとなり「裏」とか「表」という概念が変わりました。

これらの素材合わせは、まさに失敗から始まっているものですから、それを「肯定的に考え直す」という作業を自然に行うこととなります。失敗を、冷静に逆から見ることができれば、様々なトラブルにも強くなることでしょう。意外な素材の組み合わせはこうした日々の生活からでも、十分見つけることができます。そして後に、そのすべてが一直線上に並んだとしたら、あらゆる素材を組み合わせ、あらゆる方向から考えることができるようになるのではないのでしょうか？

### 「ないこと」から工夫してみよう

いろいろある中から自分のイメージに合わせて素材を選び、組み合わせる作り方の対極に、「～がない」という状況で「工夫する」方法があります。「ない」という状態には、材料がないことはもちろん、道具がない、場所がない、時間がないなど、いろいろあります。当然、すべての環境が都合よく揃っている方が珍しいでしょう。

材料を様々なものに見立てて作っていく作業では、既成概念にとらわれない自由な発想が力を発揮しますが、「～がない」という厳しい状況ではさらに、既成概念や思い込みを取り払わないと何も作れなくなってしまいます。今日のように物がたくさんある生活の中では「ない」ということ自体がすでに少ないわけですから、何でも買って済ます、という考えは、意識的にしないようにしてはなりません。そして、限られた要素の中からでも、「どうしたいのか」というイメージをはっきり持つことができれば、新しいものを買わなくても工夫できることはたくさんあります。

これはほんの一例ですが…「絵を描こうとしたら紙がない」とか「貼ろうとしたらのりがない」といったこと、誰もが経験したことがあるはず。子どもが困っていたら「どうなればいいのかと思うの？」と聞いてみましょう。その答えは必ずしも「買って！」ではないはず。そう、簡単に買って済ませようとするのは大人なのですから。

**\*絵を描こうとしたら紙がない** 描けるものがあれば何でも良いと考えます。そしてこんな時こそ、思いきって違うものに描いてみます。折り紙や広告の裏、というような当

たり前の物ではなく、アルミホイルの芯、お菓子が入っていた箱の内側、無地のペーパーバッグ、着なくなったTシャツなどなど。お母さんも怒らなくて済むようなものはいっぱいあるのです。わざわざお金を出してスケッチブックを買ってきてしまうより、ずっと楽しい経験ができますね。

**\*貼ろうとしたらのりがない** くっつけばいいと考える。簡単に言いますと、のりがなければのりを作ればいいわけですから、ごはん粒でも小麦粉を溶いてもいいでしょう。しかし、くっつけるということの根本を考えると、必ずしものりである必要はありません。縫ってつける。ねじってつける。折ってつけるなどなど。縫ってつけるのは、針と糸でなくてもいいですね。ワイヤでもヒモでもいいでしょう。そしてねじれるのは針金だけではありません。ロープは何本かのヒモをねじりながらまとめてありますし、紙やアルミホイルもねじれます。折り紙は折るだけで様々な部分がかっついていきますね。これをいろいろな場面に応用していくのです。

このような考え方をしていくと自然に、裁縫箱の中にあるものは洋裁をする時に使うもの、のりは工作、絵の具は絵画という枠がなくなってきますね。これが既成概念をはずす、ということにもつながります。

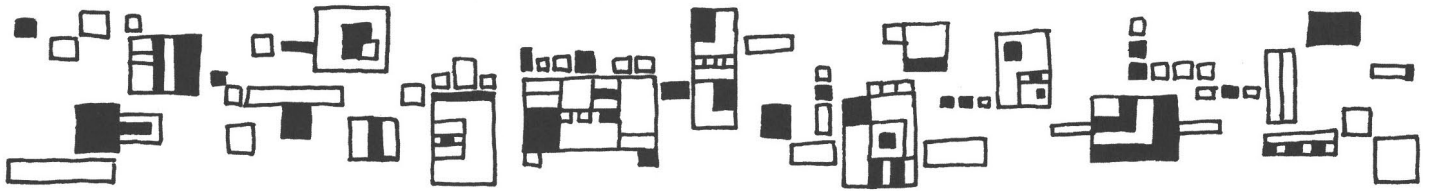
### 楽しい工夫は外でもできる

では少し外に出てみましょう。私は子どもが小さい時は、よく浜辺へ連れて行きました。

浜辺には必ず何か落ちていたものです。しかし、気の効いた材料や道具はもちろんありません。貝や木、枝、石、プラスチックゴミが多いでしょうか。そして砂と水。これらのものを使って何かを作ったり描いたりするのは、綺麗な机に高価な画材セットで絵を描くより、はるかに楽しいものです。

まず「見つける」とか「拾う」という行為にはイメージのアンテナが鋭く働いていますし、動き回って探しますから、光や風を無意識のうちに感じています。これがさらに感覚を刺激するでしょう。こういった中では、たとえ材料が「ゴミ」しかなくとも大満足のものが作れるものです。もちろん海に限らず、公園や野山でもいいですね。小さな庭でも、ベランダでもできることです。

**\*海で作る** 浜辺などの広い場所では、とにかく全体を見



渡しても何も見えません。足元半径1メートルくらいでしょうか。まずは「見てみよう」から始まります。そして実際に手に取り、拾ってみる事です。また、道具はありませんから、砂は手で掘ったり、靴で掘ったり、貝で掘ったり、棒だけでも穴は掘れますね。そして浜辺自体が大きな砂の土台ですから、いろいろなものを自由に刺したり固定したりできます。流木は柱になり橋になり、テーブルやイスにもなるでしょう。人や動物にもなるかもしれません。綺麗なビーズやモール、リボンがなくとも貝や石、木の実、プラスチックなどが個性的な飾りとなります。また、サインペンがなくても模様は描けます。そう、落ちていたビニール袋の端に小さな穴を開け、海の水を汲んできて、砂の上に描くのです。「ないこと」などはまったく問題にはなりません。逆にそこから広がる世界は、屋内で作るよりはるかにダイナミックなものとなるでしょう。

**\*庭やベランダで作る** 海がなくても大丈夫です。庭やベランダの鉢植えを使ってみましょう。いろいろな形の葉っぱや花の植木鉢、シャベルにじょうろ。それらの配置で絵を描くように、立体コラージュをしていくのです。植物によって緑の色や質感が違いますから、位置を変えるだけで違う世界が広がります。背の高い順に並べたり、色の違いによって並べ変えたり、また、直線に並べる、円に並べる…並べ方だけでも何種類もありますね。そして今度はシャベルやじょうろも組み合わせてみます。コラージュ用に綺麗な材料を揃える必要などまったくありません。落ちていた葉っぱや石もマジックで模様を描けば素敵な飾りになりますね。その他、牛乳ビンなどに剪定した葉や花を挿して、鉢と組み合わせて並べても楽しいでしょう。ビンにビー玉などを入れると、鉢の落ち着いた色とは対照的にクリアな季節の光を感じることもできます。

作ることは、何かの物体を作り出すということに限られません。並べ変えたり、組み合わせを変えたりして「今までと違う世界」を作り上げることもそうなのです。そして「さあ作ろう！」と構える必要もないですし、きっちり材料を揃えてから始めるものでもありません。小さい頃からごく身近にあるものなのですから。遊ぶように自由に広げ、楽しさと共に自分の心にしまうのです。

そして、「ないこと」から経験した工夫は、いろいろな素材を組み合わせる時にも大きな力を発揮し、逆に、いろいろな素材を組み合わせられるからこそ、限られたものの中でも、自分らしさを保てるのです。

イラスト：相馬智寿子

